

福島第一原発で多数の住民の被曝が次々と明らかに
なっている。避難指示の範
囲にいれば大丈夫か、そも
そも放射線の監視は万全な
のか。

現在出されている避難指
示は、福島第一原発から半
径20キロ圏。範囲を決め
る目安になるのは、事故で
放出が予想される放射線の
強さだ。

政府の原子力安全委員会
が定める指針では、健康へ
の深刻な影響が懸念される
50ミリシーベルトで「屋内退避」

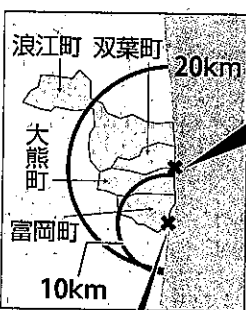
文部科学省は、今回の事
故が深刻化して原発内の放
射性物質がすべて放出され
た場合、周辺にどう汚染が
広がるかをコンピュータで
計算。地形や気象条件など
も踏まえ、50ミリシーベル
トの汚染は半径数キロの範囲内
に収まると予測した。専門

家で構成する原子力安全委
員会が、こうした拡散予測
などを参考にさらに検討を
加え、最終的に首相が避難
指示を出す仕組みだ。

当初、半径10キロだった避
難範囲が12日夜、半径20
キロに広げられたことにつ
いて、元原子力安全委員の住
田健二・大阪大学名誉教授
(80)は、「今回の事故の規
模からみれば、原発から半
径10キロ以内の避難が行
われていれば、健康被害は
心配ないが、住民の安心を
線量を監視してきた。これ

観測体制を支援するた
め、原発が立地する自治体
でつくる「原発関係団体協
議会」(幹事・石川県)は、福
島県に観測機器や観測車の
派遣を開始した。石川県に
よると、13日現在、青森、新
潟、石川、福井、静岡県が、可
搬式の観測機器計11台と観
測車2台、技術系職員計十
数人を現地入りさせ、国が
設定した避難区域の境界付
近で放射線測定を行ってい
る。簡易型の防護服も相当
数を輸送したという。

50ミリ・ベルトなら「避難」 10〜50ミリ・ベルトで「屋内退避」



福島第一原発	
1号機	地震直後に原子炉を安全に冷却する機能を喪失。12日午後3時36分ごろ、原子炉建屋が水素爆発で崩壊。冷却水の水位が低下し、核燃料が露出。炉心溶融が生じたため同日深夜、炉に海水を注入。発熱を防ぐボウルの注入開始。徐々に冷却が進んでいるとみられる。
2号機	炉内に注水し、冷却水の水位は安定。圧力も正常。異常事態に備えて、格納容器内の圧力を下げる準備。
3号機	13日早朝、原子炉の冷却機能が不能になり燃料棒が露出。東電が非常事態を報告。同日午前8時41分、格納容器の圧力を下げるため、放射能を帯びた水蒸気の大気放出。炉への注水開始。午後1時すぎから、炉へ海水も注入。原子炉建屋内に水素がたまっている可能性があり、1号機に続き爆発の懸念も。
4号機	地震時、定期検査のため炉は停止中だった。格納容器内の冷却水漏れはなく、炉内の水位も問題ない。
5号機	同
6号機	同
福島第二原発	
1号機	地震直後に自動停止。炉の圧力を抑える機能を喪失。
2号機	同
3号機	地震直後に自動停止。
4号機	地震直後に自動停止。炉の圧力を抑える機能を喪失。

※ 放射線物質の漏れなどの危険性が指摘されている原子炉